人類の救いとしての共同性
——岡山大学紛争が現代に投げ掛けた問い

能勢伊勢雄
展覧会企画・写真家

「人間の最後の救いは、何によってもたらされるのか？」
35年前に作られたドキュメンタリー映画に込められた
メッセージ。

能勢伊勢雄先生のレクチャーは、先生自身がカメラを回して撮影し、編集して約 10 年をかけて作られた映画の上映です。能勢先生のお話と当日の資料の内容を補足的に交えて、35 年前に作られた映画を通じて何を伝えようとされたかについて、ご紹介いたします。「これから『共同性の地平を求めて』という、ほぼ 100 分の映画を見ていただきます。60 年代後半は、ビデオカメラは放送局にしかなくて 1 台 1 千万円もする時代でした。経済的な余裕など皆無のなか、私の 20 代に作った映画です。主人公は荻原勝さん。岡山大学の造反教官と言われた方です。営々とフィルムを回して、独白というか、喋る瞬間を待って撮影して、それを編集しました」。

当時、日本の大学のそこかしこで吹き荒れた学園闘争。その渦中にあって、「岡大闘争」の中心的存在であった荻原氏の生活に、能勢先生は文字通り寄り添うようにして撮られたといいます。静かに流れていくモノクロ映像のなかの時間は、実際には「ふつうでは考えられないほどの時間がかけられている」と、お話しになりました。能勢先生は、なぜそれほどにたいへんな時間と手間をかけて、荻原氏の言葉の出現を待ったのでしょうか。

レクチャー資料のレジュメのなかに「山形国際ドキュメンタリー映画祭'95」のパンフレットの内容として「監督メッセージ」が転載されています。

〈この映画は私的な映画である。映画『共同性の地平を求めて』は、全共闘世代に属する作者と時代の状況が交差するかたち、すなわち作者である所の《私》の生活史と 70 年代状況との織物として完成した。60 年代全学連運動がイデオロギーや大義名分に支えられた政治運動だとしたら、70 年代の世界を席巻した全共闘運動の抱えた問題は、市民社会の共同幻想崩壊後の状況を"いかに個々人が《共有》するか?"にかかわっていた。そしてこの状況の拡がりのなかに作者もあったのである〉。〈映画は表面的には岡山大学・学園紛争の(俗に言う)造反教官・荻原勝氏をドキュメントしたものである。が、氏にカメラを向けるためには、あらゆる表現に共通する、作者の生活史との交差が必要であった〉。

こうして撮影することを自分の生活そのものにしていった能勢先生は、主人公についてこう紹介されています。〈(略)荻原氏は"ことばの沈黙"をもってのみ答えてくれた。当時の状況(大学紛争)のなかで、氏自身の生活史をカメラの視線に不本意ながらも晒すことを許してくれたのであった。私は荻原氏の語りを通して《私》の問題意識と焦点を結ぶモノローグを映画のなかに取り込んでいった〉。能勢先生が自分のメッセージを託した荻原氏との関係は、特別なものだったようです。「この映画は、彼と共犯関係で撮っていないのです。私自身がただ彼に共感を持っていて、それでカメラを回し続けました。ドキュメンタリーをお互いが一緒につくっている、そんな共有はない状態で作り続けました。彼は私に対して、君は不特定の"他人"だと言う。何度も会って酒を飲んで話をしているときにも、面と向かって"他人"だと言われることにたいへんな驚きがあった。でも、その"他人"の意味が映画を作っていくなかでわかっていきました」。「映画を作る過程がこんなに非常に特殊なかたちでできたドキュメンタリーは他にないだろう、という自負があります。詩人のリルケに"自分の心に向けて語りはじめたときに、本当のことが顕れてしまう"という言葉がありますが、私は荻原勝

の"独白"にちかい言葉が漏れ出てくるまで、ずっと撮り続けました。ぼくを撮っても何も映らないかもしれないよ、と言われても、必死になって作りました。では、ご覧ください」。

上映が終わると、能勢先生はこの映画が現代にもつ意味について、社会の変化に触れつつ、改めてお話しになりました。

「1962 年に第二ヴァチカン公会議が出した報告書のなかに、現代に通じるさまざまな問題、世界全体の危機や経済の時代の到来やテロの出現や若者の反乱などがすでに、触れられていました。大学紛争は 60 年代末ですが、荻原氏はそうした問題のひとつが大学紛争に現れたのだと考えていた。新しい生き方を求める世代が出てきた時は、それまでの市民社会特有の言語が崩壊し、それまでの言葉が共有できなくなる。当然、ひとは孤立します。そこで初めて他者と繋がるあらたな可能性を模索するようになる。それがこの映画のなかの荻原氏の中心的な発言です」。「私には、そうした彼の言葉は当時とても新しかった。今自分のなかで起きていることが正確に表現できない。そんなお互いが孤立してしまっている状況でも、もう一回言葉をまさぐっていくことが、人類に残された一番大事な機能ではないかと思います。そんなことを今回の山のシューレのテーマの"言葉"という点についてお伝えしたかった」。

じつは、この「山のシューレ」に能勢先生は荻原氏を招かれました。高齢の荻原氏は体調のためにご参加になりませんでしたが、長文のお手紙で能勢先生にご返事をされました。資料に掲載され、紹介されたお手紙には、当時をふり返って、若き能勢先生が自分のことをどう撮ろうとしているかを一切問わずに「すべて制作者の君に委ねて」いたと、時を超えた信頼が深く綴られていました。